



シニアライフアドバイザー  
松本すみ子

南アリア代表、NPO法人シニアワークスRyoma 21 理事長。シニアライフアドバイザー、キャリアコンサルタント。早稲田大学第一文学部卒業。団塊・シニア世代の動向研究とライフスタイル提案、市場分析などを行い、講演・執筆など多数。大人のためのインターネットラジオ「あすも」のMC。著書に「地域デビュー指南術～再び輝く団塊シニア」(東京法令出版)など。

知ること、まちに誇りを持ち、環境のことも考えるようになってほしいのだ。

しかし、活動を続けるのは簡単ではない。市の支援は2年で終わった。準備には時間がかかるし、資金も必要だ。有難いことに、子供たちのためにと気持ちよく援助してくれる女性の経営者団体がある。肥料の資金が足りないときは、大谷さんが商店街を回り、2千円寄付してくださいとお願ひする。「小学校の児童と桜の木を植えます」といえば、2万円は難しいが、2千円なら出しやすい。植えた後は写真を撮って、お札の言葉を添えて報告する。なかなかの手腕だ。

桜の活動としては、立川の国営平和記念公園で開催している「桜コンシェルジュ」もある。桜で交流ができた小金井公園、上野公園、千代田区、墨田区、世田谷区、さらに茨城県日立市、北海道夕張市など、桜に関わっている人たちが

紹介するイベントだ。2018年4月で11回目を数えた。

大谷さんは「桜が観光名所だから大事にしたい」というのとは違い

## ボランティアもつらいよ

課外授業時に、生徒からこんな質問を受けたという。「大谷さんは多摩川清掃活動や桜守とかやっているけど、生活はどうしているんですか」。大谷さんの答えはこうだ。「生きていくためにはお金が大事だが、1番ではない。お金はないけど、自慢できるくらいの友だちがいる。何のために生きるかだ」。

活動に参加した市民や商店街の人や子供たちから、たくさんの手紙が届く。嬉しいことに街を歩いていると、声をかけてくれる。大勢の子供たちを小学校時代から知っている。それが大谷さんの宝物であり、原動力だ。

とはいえ、やはりボランティアで生きているのは厳しい。大谷さんはカルチャーセンターの講師などで生計を立てているが、ボランティアが生活のかなりのウェイトを占めている。すべての学校に報酬があるとは限らないから、自前で活動費を出すことも多いらしい。万

ます。いい町にしたいんです」と強調した。最後に、今年の桜並木もきれいだったでしょうねと問いかけると、「忙しくて、ゆっく

一、病気になったら、まずいなども思っている。

そのためにも、有償ボランティアの仕組みを整えていこうとしている。お金のためだけではない。活動では準備や交渉にも多くの時間と手間がかかる。メンバーへの依頼がいつも無償では心苦しいのだ。仲間を引き入れるためにも、いい活動を継続していくためにも活動資金は不可欠。志だけでやっていけないものではない。

今、ボランティアは従来の無報酬・奉仕型から、有償ボランティア



多摩信用金庫のウィンドウにはお母さんや子供たちと作った自然観察を展示してもらっている

見る余裕がなかった」と照れたように答えた。花見は逃したとしても、樹木の変化は今後も見逃すことはないだろう。

アにシフトしつつある。無償ボランティアの場合には時間もお金も余裕のある人が善意で活動することが多い。その場合、受益者が不満に思っても、無償のために黙ってしまうこともある。

有償活動では、最低限の活動費(交通費、通信費、材料費など)確保に努め、余裕が生まれれば、活動した人に報酬も支払う。それなら、一部の篤志家だけでなく、幅広い人がボランティアに関心を持ってくれる。そして、意欲と能力のある人材が確保でき、満足感も高く質のいい活動を継続できるという考え方だ。

重要なのは自治体の支援だ。少子化と人口減をかかえ、職員も減少している今、多くの自治体が協働事業という形で、市民の力を活用する方法をとっている。ただし、市民は支援を望みつつも、干渉されない自由な活動を望む傾向にある。そうした市民感情を受け止め、行政の立場を説明しつつ、その力を最大に引き出す手腕が求められる。